

文化のもつ生存力

かんばしげのぶ 九州大学大学院医学研究
院 教授 日本うつ病学会理事長 監修

個人には社会が至る所に浸透している、と言ったのはデュルケイム・Eであった。今風に言えば、人の脳は、遺伝子で作るハードワイヤーと社会や文化が刻み込むソフトワイヤーから成る、ということであろうか。人は、与えられた遺伝子と生まれ持った文化に二重にコードされて生きていく。

文化には、個人や集団の生存力を高める機能がある。共感、互恵行動、自己犠牲などの、高度な感情や行動により築かれてきた習俗や儀式などには、これまで人の生存に貢献してきたといえるものを見つけることができる。た

とえば死者の埋葬である。人類は二万年も前から死者を吊ってきた。やがて人は宗教のもとに「人の死」を儀式化してきた。それは、親しい人を失って悲哀反応を起こしている遺族の存在を周囲に知らせ、脆弱な遺族たちを自然と周囲が支え協力する、普遍的な生き残りへと姿を変えた。同じように、戦後の復興とともに築き上げてきた、終身雇用・年功序列、家族的経営という日本の企業文化は、就労者やその家族の生存力を高めてきたはずだ。

一九九〇年代に入り経済が低迷すると、グローバル化とIT化の波にも後押しされ、職場や地域から共同体的雰囲気徐徐に失われていった。どの組織も生き残りをかけて自由競争の中で目的を追求する、優勝劣敗の時代へと姿を変えてきた。就労者も以前のように企業に対する愛社精神や牧歌的な忠誠心をもてなくなり、資本主義の成立期にあったような、失業の恐怖と隣り合わせで働くようになった。ちなみに、エリザベス朝から産業革命にかけて、

イングランドではうつ病が大量に発生したことをご存じであろうか。大陸ではこれを「la maladie anglaise (英国病)」と呼んだほどである。

日本でも、うつ病という診断名での受診者数が十年で二倍に膨れあがり、二〇〇九年には年間百万人を超えた。それもとくに若年成人での増加傾向が突出している。このうつ病の増加と日本社会の急速でしかも方向の定まらない動揺とは無縁ではないように思う。私たちは、新たな社会に適した文化装置の建設に間に合っていないのだ。そこで取って代わったのが人の悩みを精神医学の言葉で語り、精神医学によって癒されようとする、悩みの精神医学化である。苦難を象徴化し、うつ病として語ることは、その者が苦難に押しつぶされなかったための無意識の作業となつたのかも知れない。彼らは様々な症状を抱えながら精神科を訪れ続けている。

一方で人は、何十万年ものあいだ飢餓の淵を生き延びてきた心性を獲得している。抜け駆けや独り占めなどの利

己的行動は、集団全体を生存の危機に陥らせる可能性があった。更新世に生まれたこの行動原理は、やがて部族社会の掟（ハイエク・F・A）となった。疾患と苦難の表現との区別が明確でないうつ病では、誰彼の区別無く、苦境において苦難を引き受けようとする「弱者」であるかのように見なされ、冷ややかな視線が向けられやすい。この生得的な行動原理は、ときに私たちを弱く対して冷たい集団としかねない危うさを含んでいる。だからこそ私たちは常に、「強いものには強く、弱いものにはやさしく（小泉信三）」ありたいと思う。

人のこころは進化も進歩もしていない。目を見張るような科学技術も、人の道具を使う能力が進歩してきただけに過ぎない。いつの時代も人の魂は「根をもつこと」(ベイエ・S)を切実に欲するのである。だから、共同体の弱体化は深刻な問題をもたらす。経済的に同程度に豊かな諸外国に比べて、日本では、国民の幸福感が低く（二四八カ国

中五九位）、自殺率も高い（米国の約二倍）。うつ病と自殺で、年間に約一・七兆円もの損失が生じている。

私たちに、今の時代に相応しい、生命のかつ人間的な、社会の制度化が必要である。私たちに、集団文化の創生を得意としてきた長い民族史がある。にもかかわらず私たちは、経済の新成長や生態系の保護に躍起になるあまり、文化のもつ生存力のことを忘れがちなのではなからうか。

三田評論 2011.1.1.

巻頭随筆より、